と共に太平洋の海底に、そしてシベリア大地、凍土の下に眠っていることを思う時、何故この戦争が、誰がこの戦争を……と思ってしまう。

シベリア抑留体験記

岡山県　田中一司

シベリア抑留から帰国後五十余年、抑留生活の悪夢も遠い思い出となっている今であるが、三年半の抑留生活の細かいことは忘れたが、苦しかったことは決して脳裡から消えないで、五十年前のことが昨日のことのように強く心に残っている。

私の体験と共に、ソ連のウズベックスターンにあるアングレーンという炭鉱町で抑留生活をされた池田幸一氏が書かれた『虜友記』の中から抜粋して記述する。

昭和二十年八月十五日、終戦。満州鞍山飛行場の戦闘指揮所で玉音放送を聞いた。

ソ連軍の命令で我が部隊は、鞍山昭和製鋼所の工員寮を宿舎として、自動車で毎日朝八時から午後五時まで製鋼所の解体作業を実施した。現場には自動小銃を構えたソ連監視兵がついていた。作業監督は邦人で、我が中隊は選鉱場といって山から掘ってきた鉄鉱石を粉砕して、水流によって鉄をとり出すのである。

いろいろな機械を分解、切断して貨車に積みこむ。この解体作業は昭和二十年九月から十一月中旬ごろまで続き、我が部隊は鞍山の某小学校に集結した。ここで食糧の米を靴下に詰めこみ、缶詰、携帯燃料、下着、防寒用衣類など、自分の力で持てる限りの食糧と衣類をリュックサックに詰めこんで鞍山駅まで歩いた。同胞の日本人に涙を流して見送ってもらった。汽車に乗ったら内地に帰ることができるだろうと勇み足だった。駅に着いてみると客車ではなく貨車であった。一貨車に約八十人乗ったのであるが、貨車の中に長い板がたくさん積んであった。

夕暮れ時汽車は出発した。戦友たちが磁石を見て、どうやら北に向かっていると言った。車中では雑談

に、奉天駅から朝鮮に向かって行くのかもしれないなどと言っているうちに奉天駅に着いた。我々の貨車には約二千人は乗っていた。この奉天で下車して飯盒炊飯をした。燃料を調達して楽しく食事をした。ところが食事を終えて乗車したら約五百人が脱走したことが判明した。

ソ連輸送指揮官が激怒して、それ以後は絶対貨車の扉を開けさせなかった。食事受領の時は監視兵引率で厳しい取り締まりであった。

貨車の中は窮屈で、小さい鋸で板を切り紐や針金で二階を造り、全員がどうにか足を伸ばして寝られるようになった。便所は後部の隅の床を切り、用便の時だけ開くように工夫した。天幕で囲いを作り、にわか便所を造った。貨車が停車すると、満人婦女子が焼きパン、トウモロコシ、果物などの食品を持ってきたので、物々交換をした。鋸で貨車の横板に穴をあけ、貨車の中から靴下とパン、手袋と果物というふうに物々交換をした。

北満のハイラルに着いたとき約八百人の警察官の抑留者を収容したので輸送指揮官も満足で、それからは少し警備がゆるくなった。

ソ連領内に入ったとき、服装検査、所持品の検査が行われた。一人ずつ検査するのだが、貨車の外の広場に自分の所持品が全部広げられ、ていねいに点検された。私はこのとき、軍刀二振り、双眼鏡、拳銃一丁、写真機を没収された。大体検査が済み没収が終わると、一人ずつもう一度検査され貨車に乗った。

停車時間が長く、駅でない所に何時間も停車することがたびたびであった。貨車の上には警備兵が常に歩いて、屋根の上から監視しており、もし小窓から頭を出して外を見ようものなら、たちまち発砲してくることもあった。扉を開く時は食事受領と飲料水受領の時だけである。ソ連領に入ってからも貨車が停止すると婦女子たちがパン、菓子、果物などを持って集まり物々交換をした。これが実に楽しい時で、わからないロシア語、相手に通じない日本兵の言葉、「ダワイ」「ヴィストレー」「ハラショウ」とにぎやかであった。

十一月中旬になると寒くなり、毛布をかぶって寝た

り起きたり、自由自在の貨車の中の生活であった。将棋、囲碁、トランプ、カルタ、花札、短歌、俳句、川柳など、自分の能力に応じ十分時間があるので楽しく毎日を過ごしたとも言えよう。運動不足になるという心配もあるが、客車のように乗り心地が良くなく、貨車はよく揺れて背中に響き、運動をしなくても効果があり空腹にもなった。私は二階の窓ぎわにいることができて、読書ができ、幸いロシア語の本を持参していたので少しずつ勉強し続けることができた。

この勉強が労働するとき大きく役立った。作業監督と交渉するとき早速役に立ち、作業内容、ノルマ、物の名称など具体的な交渉ができた。語学は生活しながら勉強するのが良いと言われるが、働きながら、苦しみながら勉強したロシア語は、五十年も経過した今でも何とか会話ができそうである。先年北海道に旅行して札幌でロシア人と話し合ったが、曲がりなりにも会話ができたことはうれしかった。

配給のパン、おかゆ、スープでは物足りない。靴下に詰めこんだ白米を十分洗わないで飯盒に入れ、缶詰の空き缶を利用して携帯燃料や木材を小さく割って炊飯を行った。しかし、貨車の中は煙が充満するので炊飯は制限しなければならなかった。また、小学校で自分が携行できる極限の米、缶詰、乾燥食品等を持ちこんだので相当の余裕があったとは言え、炊飯の原料や燃料も次第に少なくなってきた。食事にも個人差があり、輸送も二十日経ったが、戦友たちが話し合っているのを聞いても、あとどれくらいで目的地に到着するのか判明しない。食べることより、早く長い貨車の旅を終えたいと熱望する毎日であった。

シベリア鉄道の貨物列車に詰めこまれた長い旅で、昭和二十年十二月、三十五日目に、アングレーン駅に到着した。

アングレーンは、中央アジア、ソ連圏、ウズベック共和国の一寒村で悪霊の谷という。北緯四十一度、東経七十度、近くに見える山並みは天山山脈の西の果て、東の山の向こうは中国、南の山の向こうはアフガニスタンである。海抜一五〇〇メートルに近いこの炭鉱町は、冬は零下三〇度、夏は四〇度を超える高原特

有の気候で、足を伸ばすと一メートルもある毒蜘蛛がいるといった未開の土地だった。この町の都市建設の目的で、日本人捕虜が八千人ほど配置され、四つの収容所に分けて入れられたが、これらの収容所は、それまで囚人用に使用されていたらしく、飢えた南京虫とノミが充満していた。

収容所の広さは東西約八〇〇メートル、南北も東西と同じぐらい、四隅に望楼を設け終日監視兵が目を光らせていた。有刺鉄線を二重に巡らし、その間が約五メートル、逃亡防止の垣である。この収容所の中に約二千人が収容され、一つの幕舎に約百五十人から二百人収容され、木製の二段ベッドで、上に二人、下に二人、頭を内側に向けて足を伸ばして寝られるようになっていた。上の天幕からと下の柱から南京虫が攻めてくる。上から落下する虫は退治できるが、下からのぼってくる虫に対しては油をまいて防ぐがなかなか思うようにはいかない。真冬になると中央にストーブを一個設置するだけで、毛布をかぶって、どうにか寝られた。

便所は穴を掘って板を張り、用便をするところだけ穴を切って、何人も並んで話をしながら用を足すのである。幕舎の中に造られた大便所で何十人も一度にできた。

収容所には、守衛所があり、ここを通って作業や外出の時、人員点検、所持品検査を行い、警備兵が引率して、誰がどこにどんな作業や用事で出入りするか点検が厳重であった。この守衛所を出入りするには、腕章をつけた警備兵なしの日本兵がいて、自由に自分の用事をすることができた。当初はこのベスカンボーイ（警備兵なし）のきまりはなかったが、二年目ぐらいから次第に増加した。この役になると、バザールに出かけたり、ソ連軍の高官の宅への用使いなどで出入りすることができた。

食事は食堂で朝と晩の食事をした。

アングレーンでは、軟らかい油性の多い無煙炭が無尽蔵に掘り出せる。日本兵の多くはこの採炭とそれに必要な施設づくり、そして新しい鉱脈のための河川移転切り替え工事の三つが労役の柱になっていて、捕虜

たちはそのいずれかに使役させられていた。鞍山ラーゲルの一部の者はセメント製造工場をつくる労役に従事した。私もこの作業にほとんど携わった。私たちはこれらを炭坑、ソツゴロ、カナールと大別して呼んでいたが、ソツゴロとは丘の上に進められている集合住宅の建設作業のことであり、カナールとは運河づくりのことであった。

村のほぼ中央を流れ、タシケントの南西のシルダリア河に合流して、果てはアラル海に消えるアングレーン河の河底一帯が、豊富な無煙炭の鉱床だったので、川の流れを切りかえ、干しあげるための運河作業であった。そのため囚人や日本兵が駆り出され、私もある期間カナール作業をしたが、辛い作業であった。一日三交代で、特に雨天の夜間の作業は辛かった。ソ連の連中は単調な作業に強く、同じ仕事を同じ調子で飽きもせず続けることは平気で、つまり純粋に肉体ばかり使って働くが、日本兵は頭を空っぽにしたままで体を動かす作業はどうしても苦手であった。人間の営みには変化が、労働にはリズムが必要なのである。

強制労働の作業内容は、私の関係したものを中心に挙げてみると、住宅建設では土れんがづくり、穴掘り、大工仕事、屋根づくり、左官仕事、そしてカナール、セメント工場建設作業等であった。

土れんがづくりは、赤土を掘り出し、水と混ぜ合わせ、人間の頭大に丸めた赤土を標準の木箱に詰め、干場に運び日干しにする。ノルマは一人二〇〇個であった。穴掘りは、台地一帯のいたる所に都市建設計画のためいろいろな穴を掘らされた。浅い穴、深い穴、大きい穴、小さい穴、その穴の大きさ、深さに応じてノルマがあり、土れんがづくりと共にパーセントがあがらなかった。また、家屋づくりは、半地下のものが多く、大がかりな横穴を掘った。道路の側溝掘りは、深さ五〇センチ、幅五〇センチの溝三メートルが一人一日のノルマであるが、家屋づくりでの横穴掘りはこれに準じており、なかなかノルマは達成できなかった。

屋根づくり作業は大工仕事が終わってからである。大工作業は半地下の家づくりで低い屋根のため入口を造り、屋根の下柱、下地を造り、その上に板を張る。

屋根はコケラ板（薄い短冊状の木片）を小まめに重ねて張りつめる。左官仕事は、おがくずや馬ふんなどを混ぜ、荒壁をつくり、その上に石灰水を大きな左官こてで塗りあげる。その他、家の周囲の排水溝など、念を入れた家には、ポプラなどの植樹をするものもあった。住宅建設の作業は馬鹿力を要するので、ノルマ達成は困難で平均して五〇％ぐらいであった。

セメント工場建設作業は鞍山ラーゲルの日本兵特有の作業で、入ソ以前に鞍山製鋼所解体作業に従事した経験もあり、セメント工場建設作業は得意の労働で、ソ連の作業監督のきびしい要求もあったが、意欲的に協力して作業をすることができた。

約二百人の作業人員がいろいろな作業に従事した。ドイツから運送したセメント造りの中心となる大回転窯といって直径約二メートル、長さ約四十メートルの鉄の筒で厚さ約三十センチ、筒の中は螺旋状の溝がつくられ、大きな鉄筒が回転するとこの螺旋の溝の中を乳状にまで粉砕した石灰石を流すのである。

工場建設にはいろいろな部門があるが、大別すると、石灰石を粉砕する作業機械、石炭を粉砕する機械の設置と製作、セメント工場の外郭づくり、旋盤工場、鍛冶屋工場、給水塔、水道工事、その他であるが、セメント造りの原料となる石灰石、石炭、石灰、粘土はアングレーン地区の山から採掘して運搬してきた。

旋盤工・溶接工・鍛冶屋工など、入隊前に専門的に働いていた専門工員が何人もいて能率良く作業ができ、成績もよかった。

石灰石を粉砕するには、山から運んできた石灰石をコンベアで粉砕機にかける。この粉砕機は数段階あり、次第に小さい粒状から粉状にまで粉砕し水道パイプから鉄筒の中に流しこみ、このとき、粘土、石灰の少量を混入する。石炭を粉砕する作業は、まず山から運んできた貨車積みの石炭をおろす。作業ノルマ、シャベルで掻きおろすのであるが、満載された五〇トンの石炭を、四人一組で三時間でおろし切ると一〇〇％である。この石炭をコンベアで石炭粉砕機にかけるのであるが、数段階の粉砕機にかけられ粉状になった石

炭を大回転窯に噴射し点火する。大鉄筒は約三十度傾斜しているのであるが、上部から螺旋状の溝を流れる乳状の石灰石がこの噴火する石炭で焼かれ粒状の石灰石になって流れ落ちる。この様子を見た一同は目頭を熱くして歓声を上げた。粒状の石灰石、これがセメントである。これを約一カ月空中にさらし、粉砕機にかけて粉にした後、ギプス（白膏）の適量を入れ混合したものが本当のセメントであり貯蔵庫に入れた。

石灰岩の粉砕機と石炭の粉砕機を造る作業工程と共に工場の外郭を建設した。高等な機械がなく、チェーンブロックが何よりの頼りで、溶接もガスと電気を利用して次第に工場の全容が完成した。

旋盤工場と鍛冶屋工場は別棟にあり、重要な作業で、ノルマ完了は容易で二〇〇～三〇〇％の好成績で、セメント工場作業は優秀であるとほめられた。部品づくり、ねじづくりなど、種々の作業で日本人の巧緻性を発揮したのである。

高さ十五メートルの給水塔建設では、まず水道を設置せねばならない。約一千メートル沖から水を引く作業は、約一・五メートルの土管をつなぎ合わせるのであるが、その前に幅約八十センチ、深さ約一メートルの溝を掘らねばならない。この作業が重労働で、ノルマを平均五〇％ぐらいしか達成できない。土管をつなぐ作業も簡単なようで力がいるので、土管と土管のつぎ目に石綿を金づちでたたきこむのだが、水が漏れては駄目で、なかなか成績が上がらず、閉口した。鉄塔をつくり、その上に鉄板でつくった直径約四メートルの水槽ができあがると皆歓声を上げた。

いよいよ最後に水道に水を通すことになった。河から水を引いて千メートル離れた給水塔、高さ十五メートル上の水槽に水が流れ込むかどうか心配であった。厳しい点検を重ねて汗を流した努力が実を結んで、水槽に半分ぐらいたまったのである。そのときの歓声が今でも印象に残っている。

ところが水道の一部に水が漏れていることが判明した。さあ大変、水槽の水抜きをして、漏水している数カ所の修理作業を命ぜられた。土管の上に覆土してあるが、漏水箇所ははっきり判明するので石綿に粘着剤

を混ぜて確実に漏水を防止した。次の作業は水道配管作業で、特に重点箇所は、石灰石を粉砕したり粘土を粉砕する機械から大回転窯までの配管で、工場内のあらゆる場所への配管であった。

スコップ、のこぎり、くわなどの用具をもって、アングレーン東部の山腹の道路づくり作業はノルマが厳しく、毎日五〇％以下の成績であった。楽しみは、休憩時間や朝早く出かけた時、野人参、野ごぼう、タンポポ、おおばこ、のびる、あかざなどを採集することであった。数量は少なく、初めのうちはよかったが、次第に乏しくなった。食用になる野草なら良いが、毒草を取って腹痛を起こし苦しんで死んだ者もあり、みんな用心に用心した。動物ではヘビ、カエル、トカゲ、サソリまで取って食べた。約三〇～五〇センチのヘビが現れると二、三人かかって追いまわして捕まえる。頭から皮をむき、飯ごうの中で炊き、煮えて箸ですごくと肉がはずれるので食した。なかなかの味で山うなぎだとみんな楽しく食べた。カエルは皮をむき焼いて食べた。サソリは当初は毒が強く死ぬかもしれないと言っていたが、毒味をした者が出て、心配ないということで、みんな食べるようになった。タンポポ、おおばこなどはアクが強いので二、三回ゆがいてスープなどと混ぜ合わせて食べた。このように野外の動物や野草を食べるのも長くは続かなかった。春から秋までの期間内に道路工事をするときだけの楽しい思い出となった。塩は岩塩を焼いて粉にした。

私は小隊の世話をしていたが、中隊長が憲兵と関連があって出向されたので、中隊の世話をすることになり、内務について世話をしたが、セメント工場の作業は総監督として最後まで働いた。

さて、作業について大体の記述をしたので、内務について述べてみると、まず三年半も生活した幕舎、生涯二度と体験しない捕虜という例のない身分での生活、今となると貴重な経験であったと回想せずにはおられない。

私たち鞍山収容所（ラーゲル）には二〇〇〇人の日本兵が、炭坑、ソッゴロ、カナール、セメント工場、その他の作業に従事した。元の編成が六中隊に分かれ、それぞれ

の場所に出かけた。食堂があり作業成績に応じて各組ごとにパンが渡されるのである。セメント工場の成績は五班に分けてパーセントを受ける。旋盤、鍛冶屋の組は人数は少ないが二〇〇～三〇〇%だから、加配があり、分け合って不自由なく食事をすることができた。

配給定量は一日三〇〇グラムの黒パンと、一〇〇グラムの米、それに二〇〇グラムの雑穀が主食となっていたそうだが、とてもそんな量ではなかった。国際法で決められている捕虜の定量はこれぐらいであるが、アングレーンではとても及ばず、定量の半分ぐらいと思われる。捕虜たちは乏しい配給を補うため、全知全能をしぼって員数外の食べ物をとって食らい、それでも空腹を紛らわす薄い粥にさらに水を増して、野草やいもの皮などと共に煮直して量を増やし、黒パンもほぐして湯に入れて増量した。

食事と日常生活について述べてみると、朝は七時から食堂で黒パン、スープ（野菜・やぎの骨・乾燥りんごなど）、ライ麦の粥、コウリャンのお粥、昼は朝食と大体同じもの、夜は七時ごろ黒パンにじゃがいもの煮こみとスープ、小魚の塩もの、砂糖大根、塩漬けのキャベツ等の繰り返しで、とても労働ができる食べものではなかった。

ラーゲル生活が半年ぐらい過ぎたころ、東方にそびえる天山山脈の方向に数人の日本兵が逃亡したが間もなく銃殺されたという情報を聞いた。全く無謀なことだと思った。

収容所の生活も次第になれてくると、いろいろ工夫するが、水が少なく朝はコップ一杯の水で塩（岩塩）で歯を磨き顔を洗うという毎日であった。これは輸送中に体験したことである。現在の私の生活をありがたいことだと思う。

収容所の生活も二年目ぐらいから、充実した活動ができるようになった。収容所内で掲示される壁新聞はなかなか人気があった。炭坑から採った七色の泥絵具を使って色鮮やかな大きな新聞、ソ連側の指導による壁新聞に刺激されたかのように様々な文化活動がにわかに盛んになった。音楽、演劇、彫刻、絵画、舞踏、

寸劇、浪曲など定期的に開催されるようになった。同好のグループが生まれ、それぞれ活動をするようになり、昼間の労働（ラボート）に疲れていても、紙と鉛筆を持って会場に出かけたものである。収容所は朝に夕べに革命歌が渦巻いていた。これは民主グループによる指導である。タシケントの政治教育を受けた民主主義者である。毎晩のように室内でも屋外でも集会があり、共産主義、レーニン・マルクス主義、資本主義等について、十分程度の講義を行い、休日には演劇団による公演を行った。

民主委員会の組織については、委員長を頭に宣伝部、文化部、青年部などに分かれ、青年行動隊もあり、民主化教育にはソ連側の指導があり、『日本新聞』などがハバロフスクで刊行され、収容所にも配布され、日常の宣伝活動に使われた。

管理責任者である収容所長は、軍国主義を否定しながらもその組織の作業向上をはかるため将校団を煽りたて、一方では旧軍組織を壊して、兵士の中から積極分子を抜てき、教育して共産主義化を進めるという二本立てで、これを巧みに陽動作戦をとったが、結局は早晩後者の方向に進むであろうことは、先進のタシケントの収容所が立証していることであった。この手に乗せられている将校たちと、日本人かソ連人か判らぬ民主主義者の無節操をなげくのであるが、私は一刻も早く帰還させてもらうために、二面性のどちらにも偏らないで、本気で作業に熱中した。

昭和二十一年十一月、初めて各自に「俘虜」という特別葉書が支給された。内容はただ元気でいるとしか書けない。むろん今いる場所は書いてはいけない。内容を点検され発送された。復員後我が生家に帰り葉書が届いていることを確認し、懐かしさを覚えた。

昭和二十三年九月二十一日、アングレーンから舞鶴へ帰還した池田幸一氏は、帰還後、自由な旅人として、もう一度アングレーンを訪れている。昭和五十一年九月二十日のことで、三十年ぶりの再訪である。

彼の著作の『アングレーン虜囚劇団――ソビエト捕虜収容所の青春――』という本は、彼が体験した昭和

二十年十月十九日から昭和二十三年九月二十一日までの三年間の抑留生活、想像もできない悪条件の環境の中で苦闘した若者たちを見事にとらえた貴重な青春の記録書である。このアングレーンでの生活を劇映画にしようといろいろ試みたが、結局できなかった。

草木一つないウズベックの丘の道を日本人捕虜の行列が行く。

総て素っ裸である。何一つ持っていない。

その周りをソ連監視兵が付いていく。

その行進は、あとからあとから、何百何千と続いていく。

このシーンを映画のファーストシーンに想定していた。これは、アングレーンに着いた日、持ってきた物、着ていたものすべて没収され、素っ裸にされ、身体検査、全身消毒を受け、丘の上の収容所まで裸の行進をさせられたときの光景である。

裸の行進から始まった捕虜たちは、その日のうちに各自の階級を作り始めた。

毎日、炊事場のごみためをあさる乞食組。「彼奴は元憲兵だった」「あいつは元地方で何をやっていた」とソ連側に告げ口をし、パンの一切れ、砂糖の一かけらを稼ごうというスパイ組。純粋に共産主義に心酔していく若者。かっぱらい。ブローカー。みんな自分たちの階級を作っていった。そして僕たちは「芝居馬鹿」という階級に集まった。

食堂を会場にして、テーブルを隅に並べて舞台にした。三百人は収容できた。月替り公演。土曜日興行。日曜はラボートが休みなので昼間の興行を組んだ。二時間以上の芝居に唄、踊り、落語をつけた。

衣装は軍隊の毛布、敷布等を使った。小道具、大道具は製材所で仕事をしている者が監督の目を盗んで作った。染料、絵具は炭坑地帯なので豊富に採集できた。困ったのは顔料で、医務室にあった亜鉛華軟膏に岩絵具や草汁を入れてみたがうまくいかなかった。公演後、女形の顔がお岩さんのように腫れあがって慌てたこともあった。しかしロシア人の女性にルートをつけ、だんだんと顔料も入手できた。楽器は軍隊用のアルミの食器類を加工してマンドリ

ン、バンジョーができ、そのうち製材所でギター、ヴァイオリン、チェロ、コントラバスまで作りあげた。

最初はひどいもので常にペンチで締め上げながら演奏する代物だったが、ロシア人の音楽好きも手伝って、本物のアコーディオンや弦楽器が入手できるようになり、三年目には三十人の交響楽団にまで成長した。かつらは新聞紙で作った。これが妙にピッタリで、馬の毛で作ったものよりリアル（現実的）であった。現代ものに出る女性はすべてネッカチーフで統一した。照明器具は、鉄道の信号機やトラックのヘッドライトをかっぱらってきて使った。

上演台本は、観劇や読書の記憶を頼りに再現するよりほかになく、月替り二時間以上の舞台を考え、稽古期間、装置、大道具小道具製作期を入れると大変な難事業だった。

平易な新派、新国劇調のものから始めたが、舞台の出来不出来には端的に観客の反応が出た。つまらぬ舞台では観客は途中からゾロゾロ帰っていった。喜劇だけでもよくなかった。悲劇だけでもよくなかった。こんな環境だから何でも演ずれば客が来ると思ったら大間違いだった。舞台の登場人物が現在の自分自身の生活なり考え方なり、将来にひっかかりがあると、その登場人物について観劇後も毎日のように話し合った。それで新派の形式をかりようが、新国劇、新劇の素材をかりようが、現在の生活なり、将来への考え方なりを脚色、演出に意図しなければならなかった。舞台は常に観客と共にいなければならなかった。観客との合作だった。これは何千年来、演劇の持つ基本的問題だった。

実によく皆が各自のパートで動き回った。八時間の労働のあと、幾晩も夜中まで準備して、毎月毎月初日を迎えるような僕たちにとって、唯一の報酬は感動している客の顔、笑いを爆発させている客の顔、クシャクシャに泣いている客の顔、顔、顔――これだけが僕たちの報酬であった。これだけが僕たち「芝居馬鹿」階級に属する青年たちの生きがいだった。

「この本は池田の青春の記録だ。池田の描いた青春群像を登場させて、僕はもう一度映画化に挑戦したい。池田とは二十代前半の丸三年間をソ連のウズベックスターンにあるアングレーンという炭鉱町で共に過ごした。池田の言う、いわゆる〝虜友〟である」。以上は俳優座映画放送株式会社代表取締役佐藤正之氏が本書発刊に寄せて記述している。

池田氏の体験に戻る。

私が三十年後再びアングレーンで見た住宅団地（ソッゴロ）は、濃いポプラの緑の中で、家々から原色は消えて程よいセピアの歳月の色が調和して住む人の穏やかな暮らしを思わせていた。

町を彩るポプラは、かつて摂津隊が貧弱な苗木を植えたものである。三十年という時間の肥料が見事な並木や木立に成長させていて苦役の刻印など跡形も残していない。

私が土を掘り煉瓦を積んだ家はどこだったろうか。知ろうと思えば手だては無くもない。灰色の漆喰壁をはがして私の煉瓦を探し出せばよいのだ。捕虜たちの労苦の辛さを煉瓦に刻み、落書きをして僅かに憂さをはらしたものである。私も恋しい人の名を何枚かの煉瓦に彫ったことを思い出す。

ハバロフスクで発行されている日本語の捕虜向けの『日本新聞』が、外部から入る唯一のニュース源であった。

「飢餓と失業の真只中へ！

諸君たちは帰還したその日から、売国奴どもに労働を切り売りしなければならない。働く職すら保証されない社会へ」

「一千万の失業者の洪水！」

「信ずべき情報によれば、諸君たちが帰る日本には顕在せる失業者のみでも六百万、潜在失業群を合算すると、優に一千万の失業者が溢れていると報じている……」

伊豆春夫がハバロフスクで民主運動本部から手ひどい批判を食らった。話は何でもアングレーン地区の梯団は全ソ連捕虜集団の中でも最低だと叱責され

た。民主意識が低い上に規律も悪く、まるでなっていないそうで、伊豆もこれには参って、その弁明として山奥の僻地のため中央からの指導が遅れたことや、捕虜の編成が終戦直前に集められた老兵弱卒であることなどを挙げたが、言下に一蹴されたという。伊豆もアングレーンでは大将だが上には上があるもんだと彼に同情しているうちは平和であったが、暫くして流れてきた情報に皆は青くなってしまった。ハバロフスクでアングレーン先発隊の捕虜を二人も見たというのである。もうとっくに内地に帰っているはずの男が駅で作業をやらされている。呼びとめて聞いてみると、ナホトカまで來て残留命令を受け、ハバロフスクまで逆戻りさせられたという。このニュースは一途にダモイを喜んでいた梯団にとり一大衝撃であり、たちまち全車両、全幕舎に波及した。積極派（アクチブ）の教育が一段と熱狂さを増したことも噂の真実性を裏書きしているようであった。

ダモイの日のナホトカは朝から強い風が吹き荒れていた。シベリアの最後の土から足を抜いてタラップを踏みしめたとき、強風が足元に吹きつけ、思わずひるんで振り返ると、私の後ろは灰色の列が長い鎖のように連なって、甲板に立つまでは振り向くことも恐ろしかった。ようやく甲板にたどりついた者は、ただ飛び上がって叫ぶばかりだが、出る声ならば何でもよいのだ。「帰還者同志諸君万歳！　全国の労働者よ、団結せよ」「馬鹿野郎万歳」という者もあり、笑いこけて、そのまま泣き出す者もある。ゴールに飛び込んだマラソン選手のように、大の字にのびている男もいる。笑っても、泣いたとて、何を言おうと誰もとがめない。「今日は荒天のため、只今から甲板は閉鎖されます」と拡声器が伝えた。「兵隊さん、今日は海が荒れているから船室に帰った方が良いよ」この船の船員たちは親切であった。船中の一夜は明けたが風はおさまらず、とても甲板に出られそうもない。船室の客は、私物の整理を繰り返す者、長かった旅路の最後を経験していた。「これは祖国からの贈り物です。日本の味を心ゆく

まで味わって下さい」といって配られた品の中にこの煙草があった。「あっ（ほまれ）じゃないか、ああ懐かしい、これはありがたい」といっておいしく戴く者もあり、封も切らずに私物袋の奥底にしまう者もあり、そうかと思うと、無造作に火をつけて大きく紫煙を吐き、「うまくないね、喫いつけるとマホルカの方がうまいぜ」と反応はさまざまであった。

突然十数人が私の船室へ乱入してきた。驚いたことに、彼らは全員日の丸鉢巻きで、一人は日章旗まで持っている。「戦友の皆さん。ソ連の手はもう伸びてきません。もうここは祖国日本の一部です。我々は三年もの間、耐え難きを耐え、今……」両の脚をふん張って、手を腰に置いた姿勢で、一語一語力を込めて話すのを聞けば、我々を苦しめた非国民、民主屋を、亡き戦友に代わって糾弾すると共に、お国のためにならない国賊に、生きて祖国の土を踏ませてもよいものだろうか――と言っているのである。「そうだ、やっつけろ、吊るし上げろっ！」の声が飛ぶと、船室はにわかに殺気が立って全員は座り直していた。彼らは言葉遣いも軍隊語にかえり、挙動もかつての軍隊式を取り戻していた。抑揚のない声明を聞いていると、「一、我々憂国の有志は昨夜（日の丸梯団本部）を結成した。二、祖国へはアカを払拭して、晴れ晴れと日の丸で上陸しよう。三、そのためアカの指導者を処断し、または真の日本人に立ち返らせる。」以上の三点を強調し、今夜は甲板で決起集会を開き、あわせてアカの吊るし上げをやるというのであった。それがためには、その容疑者を皆で探索してほしいと動議し、「民主グループの指導者は自発的に前へ出ろ」と言い、「素直に出てこんと許されんぞ、お前らの罪状は、全部調べがついているのだ！」とぐるぐる船室を歩きながら叫んだ。

ナホトカですべてが終わったはずの芝居は、まだ済んでいなかった。五、六人の民主主義者がすごすごと前に出て並ばされていった。「こら、貴様も前の青年部長じゃないか」「昔の幹部でも良いのです

か？」「もちろんだ、アカに昔も今もない。皆で摘発してくれ、恨みのある奴は全部である。」これでまた数人が突き出され、姓名を聞きとられている。○○はその名簿を高々と掲げ、「これがドボン名簿だ。ソ連が好きでたまらん人には、今晩泳いでナホトカへ帰ってもらう。少々海が荒れているが、貴様らの精進が悪いためだ、あきらめてもらおう。」「○○さんよ、えらい気前が良いが、何ぞ土産は持たさんのかい」「不肖○○伍長、皆の要望ならいろいろ用意はしている。何しろ大事なお客さんだから、ゆるゆるとおもてなしをする」

リンチにはちゃんとしたルールがあるのだ。これは旧軍隊の復活であり、○○は最も忠実な伝承者のようであった。一人一人から罪状の調書をとりだしたが、弱者をいたぶる技術は巧みで、つぼにはまると観衆はどっと湧き、さらに辛辣な責め口を期待しているのであった。罪人の答えが乱れると容赦なく鉄拳が飛ぶが、これは船中の退屈をいやす最も陰湿な裁判劇であり、先刻まで温和にまどろみを愉しんでいた人々が、数人の煽動者に手もなく同情して熱狂する光景は、何とも恐ろしいものであった。

この『虜友記』を読んでくれる戦友たちの手ひどい反撃を覚悟せずばなるまい。

「嘘だ！　我々が受けた屈辱がこんな呑気なものであってたまるか。抑留は地獄だった。あの辛さは言葉にも文字にも言い尽くせないものなのだ……」「この程度のことかと受けとめられるのはいかにも心外。世に誤解をもたらすだけのものだ……」等々。これらの声は正しく、当然のことであろう。しかし私の体験もまた偽りではなく間違っているとは思わない。それぞれが生身で耐えた彼の地、あの歳月のことは、とても一つや二つのパターンでまとめきれるものではなく、六十五万の兵士それぞれの、黒パンをかじり粥をすすってダモイに耐えた六十五万の『虜友記』が綴られるべきだと思う。

虜という栄誉なき旅が私の生涯にとってどのように曲々しいことであっても、これは不本意ながらか

けがえのない青春の日々でもあった。何一つ夾雑物をはさまず運命とじかに対決し、身体を張って過ぎ越した彼の地のことは、いま思い返しても火花が散っている。へまをすればたちまち飢えであり死であった中で泣き、わめき、ののしり、くらった自分は正味の自分であり、自身に最も正直であった時期のように思える。私にはその後のことがかえっておまけのように思えてならないのだ。

私にとっていよいよ帰還の時がきた。ソ連将校と民主本部の幹部が二次のダモイの名簿を読み上げる。ロシア語のアルファベット順に、ゆっくり二度繰り返しながら名前を読む、その中に私の名を二度はっきり聞いた。その時の感激、今もはっきり覚えている。この帰還者は作業成績が良かった者や民主運動を熱心にやった者等であることがわかった。お先に帰還させてもらってすみませんと言葉には出さないけれど、心残りはあったが、アングレーン駅から貨物列車に長時間ゆられて、ゆっくりした気持ちで、景色やバイカル湖などながめながらナホトカに着いた。海岸の天幕生活だが、民主グループの目は帰還者の一挙一動に注意した。民主教育ができていないと彼等のしごきは執拗で、反動分子と見られたら、奥地へ逆もどりさせられる者もあった。仲間と話し合い迎合を装い彼らの話に聞き入ったり、労働歌や赤旗をよく歌わされた。

いよいよ乗船するためのソ連側の最後の人員点呼、乗船者名簿がソ連将校の聞き取りにくい日本語で読み上げられ、順次「信濃丸」と船腹に書いてある日本船のタラップに上った。

シベリアの最後の土からタラップを踏みしめた時の感激は今も忘れられない。甲板に上がった者は、飛び上がって叫ぶ声、緊張も統制もない。船から離れていくナホトカを静かに見て、三年半の終幕を見定めた。戦友の皆さん、ソ連の手は伸びてきません。もうすぐ祖国日本。帰ってきたのです。我々は長い間耐え難きを耐え、今ここに自由をとりもどすことができたのです。亡き戦友に代わって、非国民、民主屋を糾弾する「民主グループの指導者は前に出ろ」といったトラブ

ルが起きたが、話し合いによって大問題にはならなかった。

昭和二十三年六月二十七日朝、二〇〇〇人を乗せた信濃丸は舞鶴港に近づいた。「陸が見える、おお日本だ、舞鶴だ」目は喜びに輝いていた。紺碧の海に浮かぶ島影や深緑の山並みが刻一刻と鮮明になり、岩壁の岩肌がよく見えてきた。屋根が、白壁が、はっきり見える。

荒涼とした大陸で、ただひたすらに生きることのみに明け暮れた私たちには、目前の平穏な眺めはまさに夢の楽園のように見えた。目頭が熱くなった。

我も我もと甲板に上り、「祖国に帰ったのだ、万歳、万歳」と喜んだ。投錨と共に船脇に着き、先に患者が運ばれ、上陸した。検疫をすませ、入浴後衣類の支給があった。診察やら予防接種と諸調査、帰国の手続きに二泊三日間、八〇〇円の支給、毛布と元軍隊の夏服、下着が渡された。忘れもしない第一夜、お湯もたっぷりの浴槽に入り入浴を楽しんだ。何年ぶりかの命の洗濯であった。

万斛の涙をのみ望郷の望みを果たせず、命をなくし、シベリアに眠る抑留者の御冥福をお祈りし、御魂に謹んで哀悼の意を表し、御遺族の方々に心から御同情申し上げる次第である。

私の抑留記

岡山県　妹尾正一郎

私は、昭和十六年三月に笠岡商業学校を卒業して、三月二十九日に家を発ち、一路下関へと向かった。門司を昼出ると言いに八幡の藤沢さんの所へ行った。

昼出港のウスリイ丸に乗り、まる二昼夜で大連に着いた。途中、仁川沖で嵐に遭い、船がひっくりかえりそうになった。それも漸く収まり大連に着いた。それから二、三日大連にいた。雪が降っており、大変寒く感じた。

その後撫順に行き、満鉄撫順炭鉱に入社し、製鉄工場に配属された。製鉄工場では事務屋なので、いつも